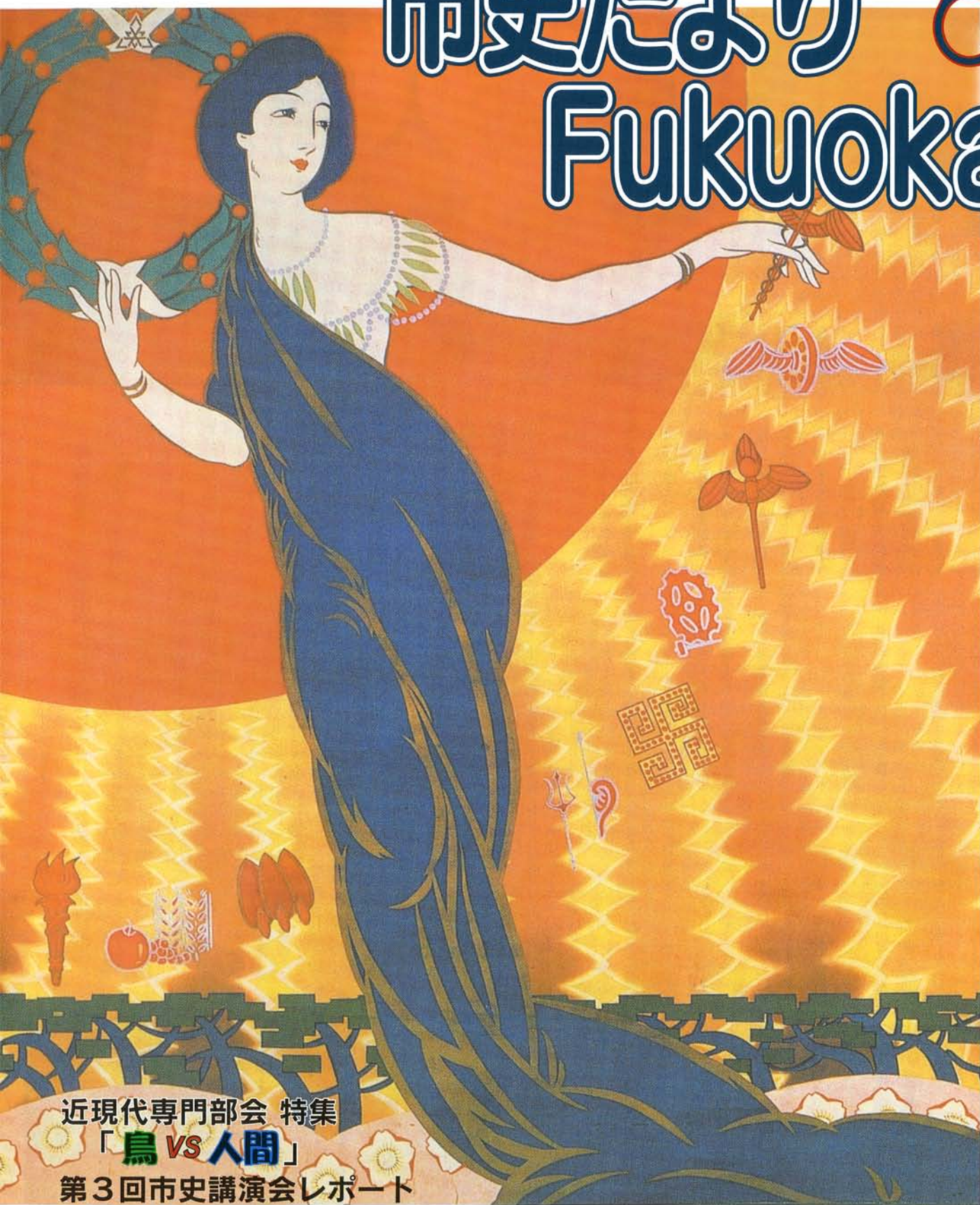


市史だより 6

Fukuoka



近現代専門部会 特集

「鳥 VS 人間」

第3回市史講演会レポート

連載 福岡市史への歩み

コラム 歴史万華鏡

部会だより/クイズ

表紙の写真は…

福岡市博物館 市史編さん室

飽くなき闘い！

福岡城内 冬の陣？！

鳥 VS 人間



舞鶴公園・大濠公園として親しまれている福岡城址には、越冬のための鴨や、博多湾の鶺鴒、福岡平野の鶺鴒といった野鳥から、鳩など身近なものまで、たくさん野鳥たちが集まっています。古い記録を見てもみると、一〇〇年以上前でも同じように野鳥の憩いの場となっていたようですが……

東京の国立公文書館には明治時代以来の公文書が保管されていますが、そのなかに明治十(一八七七)年二月に福岡城に群集する野鳥を駆除したいという記録があります。

当時の福岡城は、約一年前に歩兵第十四聯隊第三大隊の分遣隊が小倉から城内へ移動したことにあわせて、城全域と近接の堀が陸軍省の管轄となっていました。その部隊を管理していた陸軍の役所である陸軍省が、上位の機関である太政官に野鳥駆除の許可を求めています。

〔陸軍省伺〕

福岡県下福岡城内ノ樹林ニ近來鶺鴒群集イタシ、ソレ力為メ良材立枯相成候儀モ往々有之候付、同所分遣隊ノ内ヲ以テ凡三週間程鶺鴒狙撃為致度、右御聴許之上八其向へ御達有之度、此段相伺候也。一月二十六日陸軍。

追テ本文ノ趣、工兵第六方面本署ヨリ一応該県へ打合候処、支障無之旨回答致候趣ニ有之候間、此段添テ申進候也。〔

〔太政類典第二編第百六十六卷産業十五種二〕

〔大意〕

陸軍省より太政官に指示を請います。

福岡県の福岡城内にある木々に、最近サギなどの鳥が群れ集まっているため、良い木が枯れてしまうこともしばしばです。そこで駐屯部隊の中で約三週間程それらの鳥を狙撃させたいので、この件をご許可いただければ、関係方面へ通達していただきたい。一月二十六日。この内容は実行部隊の本部から福岡県へ相談したところ、問題ないとの回答を得ていることを付け加えて申し上げます。



福岡名所一福岡城址より
(昭和時代初期 絵はがき)
福岡市博物館蔵



この申請書によると、明治九年から十年にかけての冬に福岡城内に多数の鳥がやってきてそれを駆除したいという希望が出されています。この時この申請は受理された記録に残っていますので、駆除を実施することに決まったようです。また別の記録を見ると

と太政官は福岡県に対し「陸軍省の申請を許可したので承知しておくように」との指令を発したことがわかります。別の史料によると、陸軍は「野鳥の糞尿は兵士の健康を損ない、木が枯れると城郭の体裁を損ねるから対処したい」と理由を挙げています。さらに調べてみますと、福岡のほかにも東京の皇居をはじめ仙台、金沢、松江、姫路、名古屋といった陸軍の部隊が駐屯している旧城内にお

いても、群集している野鳥を同じ時期に駆除していたようです。福岡城趾は今ではサクラのほかにマツなどの樹木を植え、公園として管理されていますが、当時は現在よりもさらに樹木が多く野鳥の生息地として好都合だったので

しょう。それにしても、当時は城内に集まる鳥を駆除するのにわざわざ太政官の許可を取っていたことになりす。しかしよく考えてみると、明治十年といえは西南戦争が起こった年。明治六年の竹槍一揆以来、数年に渡って九州は何度も騒動を経験しています。その世情不安な時期に城内で発砲を繰り返そうというのですから、地域住民の不安を取り除くため、県の理解、協力が

必要になったのでしょう。

さて、福岡城に群れ集まる鳥たちからしてみれば、長年の習慣でやってきているのでしょうから、人間の都合で鉄砲を撃ちかけられてもすぐに場所を変えることはできません。結局、明治十年末の冬にも、野鳥が福岡城周辺に再び舞い戻ってきたようです。その様子を陸軍省は「一時散乱スト雖モ不逞ニシテ又群集シ到底絶跡ノ功無之候」(大意、一時は散り散りに飛び去るけれども、日が過ぎればまた群れ集まって来て、とても絶滅させることはできない)と書き記しています。かくして前年に引き続き駆除が試みられることになりました。そして今回はさすがに陸軍省も面倒だと思っただのか、軍と県が

相談して計画を立て、陸軍省が許可する体制を取りたいとの希望を太政官に述べて認めてもらっています。そのため、これ以降の野鳥駆除は国レベルで記録が残らず、いつまで続いたのかは別の史料を参考にする必要があります。

近現代専門部会 刊行計画

資料編

- 近現代1 平成二十三年度
 - 近現代2 平成二十六年度
 - 近現代3 平成二十九年度
 - 近現代4 平成三十二年度
- 通史編
- 近現代1 平成三十五年度
 - 近現代2 平成三十三年度
 - 近現代3 平成三十四年度

関連刊行物

- 近世専門部会 特別編
- 『福岡城(仮)』平成二十四年度



第3回福岡市史講演会 古代の対外交流と福岡

筑紫・那津官家・鴻臚館

日時／平成十九年八月二十五日(土) 午後二時～五時 会場／福岡市博物館一階講堂

当日の最高気温は三五度、残暑というよりまさに猛暑の中、博物館講堂の座席数を大幅に上回る三三〇名の方々にご参加を



熊谷先生

から、国同士の交流にどのような意義があったのか、互いの歴史にどのような影響を及ぼしたのか、などを明らかにしていただきました。

事前にご案内した会場である博物館講堂の二三〇席は、早くから満席となり、多くの方々には、モニターを設置した別室でご容赦いただきました。講演会は、文字どおり熱気に包まれたの開催です。

次に、福岡市文化財部の大庭康時さんから「発掘調査から見る鴻臚館」と題し、鴻臚館調査成果のダイジェスト版を届けてもらいました。今では見ることができない現地の様子を、当時の貴重な映像を使って、臨場感たっぷりに解説してもらいました。



大庭氏

最後の講演は、大宰府市市史資料室の重松敏彦先生です。「大宰府機構と鴻臚館」と題し、古代の日本において、大宰府と鴻臚館がどのような役割を担っていたのかについてお話しいただきました。「筑紫」は、古代の文献にたびたび現れ、その時代に即した役割を担っていることが記載されています。大宰府には、使節の管理・監督や饗宴など、窓口ならではの仕事もあり、鴻臚館は、その場として大きな役割を果たしていたことがわかりました。



重松先生

今回の講演会で、当時の国際情勢、筑紫の政治的位置、大宰府の役割、施設としての鴻臚館を浮き彫りにしていただきました。これらが経糸・緯糸となり織りなす古代史像は、「新修 福岡市史」にどのような形で描かれていくのでしょうか。乞うご期待！

講演会の詳しい内容は、今年度末に発行予定の『市史研究 ふくおか』第3号をご覧くださいませ。



岡中先生

満員御礼

本会場

モニタールーム

福岡市史への歩み 5

編さん室発足以来つづく長い準備期間……

庶務にあけくれる中、出版の話が舞い込んだ!

大好評、博物館顧問が贈る「福岡市史」

これは福岡市制三〇周年の翌年のことです。このことから市史編さんの必要

前回、前々回の二回にわたって、「昭和八年度 事務日誌」をもとに、

当時の市史編さん室の事業内容、活動状況などについて見てきました。そこには、市史編さんという

大義は理解してもらえても、年次計画などの細部に関する取り決め

がどの程度協議され、決定されていたのか、一切見当たりません。

『事務日誌』を見る限りでは、関連部門間の確認が取れた要綱的な

ものがなかったために、年次目標も立て難く、積極的な資料調査、

資料収集という基礎的な編さん業務もしづらかった、ということか

もしれません。それでも組織体の常として、周年記念事業は何がし

か実現しようとするのです。

現実に市史編さんの動きを見ていますと、大正九(一九二〇)年

十一月、宇佐書記が市史編さん大綱調査の命を受けていますが、こ

れは福岡市制三〇周年の翌年のこと

です。このことから市史編さんの必要性が説かれたのは大正の初めごろとされていますが、それが形となつたのが三〇周年を迎えてからの事と考えることができます。永島芳郎が市史編さん囑託に命じられたのが昭和二(一九二七)年ですから、昭和四年の市制四〇周年を控えての人事配置だったように考えられます。しかし実際には、昭和八年の段階でも何ら具体的な動きは見られなかったのです。さてそんな中、通史的なものを出版し郷土を知らしめようとする団体が現れました。福岡市教育支会(後の福岡市教育会)です。会

は、昭和三年四月にわずか二五〇頁ぐらいの小冊子ではありますが、『福岡史要』という本を刊行しています。その序文の一部を抜粋すると「抑郷土を理解し之を研究し、文化発展のあとを探り愛郷の精神を涵養することの喫緊なるこ

とは今更喋喋を要しない処である。(中略)然るに翻つて我福岡市に於ける所謂郷土史ともいふべきものを繹めるに、その梗概を誌せしものすら、之を見当らないのは、深く遺憾とする所である。されば我福岡市教育支会は、たとひ小規模のものなりとも編纂の速やかならんことを、満場一致を以て決議し之が実現を期したのである。」と出版の意図を記し、種々の故障で延期したので、福岡市史編さん囑託永島氏に依頼して多年の目的を達し、欣快に堪えないと謳っています。一方永島も公務多忙、短期即席の内容を大いに嘆いていますが、この執筆を喜んでいる節も感じられます。そしてこれには、統編的な本があるのです。

福岡市総合図書館蔵



(福岡市博物館顧問・田坂大蔵)

部 だより

調査 進捗 情報 編集 校訂 筆耕

古代

『資料編 古代』の編集に向けて、文献史料の収集を積み重ねています。公刊されているだけでも膨大な数にのぼる史料から、『資料編 古代』で収集の対象としている筑紫（筑前・筑後）に関わる史料を一つ一つ丁寧に検出していく作業は、一朝一夕ではできないものです。現在六〇〇タイトル以上の史料を見終わりましたが、『資料編 古代』刊行の間際までこの作業は続けなければなりません。筑紫に関わりの深い対外関係史料などを含めると、最終的には一万件をゆうに超える



データ入力作業

備えるだけでなく、市の財産として今後さまざまな場面で有効に活用できるように整備していく予定です。

記事が集まるのではないかと心配されます。このようにして検出した史料は一件ごとにデータベースに登録し、『資料編 古代』の編集に

考古

種が芽を出すには、土の温度や水分などが必要ですが、その条件が揃ったとしても全ての種が芽を出すわけではありません。発芽せずに土の中で眠りつづけ、発掘調査現場から見つかることがあります。種は、自然界に見込まれたのか、見放されたのか、その生命を失って形のみ遺されているのです。

さて、その遺された種は、当時の自然環境や、人間の営みを探る糸口となります。例えば、ゴミ穴に食料となっ



石化した種たち
*実寸大ではない

福岡市教育委員会2005
『下月隈C遺跡V』より
(福岡市埋蔵文化財センター蔵)

た果実の種が捨てられていれば、当時の食事情を復元する材料になるでしょう。もちろん、食材としてだけ利用されていたとは限りません。モモ、オニグルミ、ブドウ：いにしへの生活に興味がいってきますか。

考古専門部会では、種そのものだけでなく、土器に遺ったイネなどの痕跡調査も進めています。『資料編 古代3』では、かつて使われた植物の一部を紹介しています。意外なものが含まれているかもしれませんよ。

中世

平成二十一年度刊行予定の『資料編 中世1』の原稿を作成する準備を進めています。これまで五六の文書群について史料調査を終了しています（十月末現在）。

十月は九州大学附属図書館六本松分館が所蔵している檜垣文庫の中世史料の調査を継続して実施しました。檜垣文庫は九州大学名誉教授で



中世文書の調査

あった故檜垣元吉氏の収集史料群です。福岡県内だけでなく九州各県や関西地方の史料が数万点収蔵されています。これまでほとんど未紹介の中世文書や記録があり、十一月初旬まで合計七回にわたって調査・撮影を行う予定です。先日の調査では、「神松寺の古文書写」と題する明治時代頃に作成されたと思われる古文書写を撮影しました。神松寺は現在の福岡市城南区神松寺付近にあった寺院ですが、近世までに廃絶し、古文書は神松寺地区で管理されていたと伝えられています。『新風土記かたえ』（片江校区郷土史研究会、二〇〇三年）でその一部が紹介されましたが、今回調査した古文書写には、それらに収録されていない文書写しが数点含まれており、その伝来も含めて非常に興味深いものです。資料編には何らかの形で収録したいと考えています。

近世

平成二十四年度刊行予定の特別編『福岡城（仮）』の編集に向けて近現代専門部会と共同で作業を進めています。地図・絵図資料に加え、関連する文書の収集・整理を行い、併せて福岡城に関する細かい年表の作成も行って

います。また定期的に開催される編集会議では近世・近現代の各専門委員により、その内容と編集方針についての議論が行われています。

特別編『福岡城(仮)』では、まず福岡城の成立とその構造を述べ、近世から近現代にかけての櫓や門、堀が空間的にどのように変遷をし、利用されてきたのを見ていきます。また、当時の町民や市民にとって福岡城とはどのような意味があったのかも明らかにしていきたいと思っています。

福岡城というと、みなさんの関心が天守閣へと集まりがちではありませんが、堀の利用、石垣修復、櫓などの諸施設の利用、明治期以降の城内利用のされ方など多くの話があります。平成二十四年度の刊行まで、まだ時間がありますので、さらに調査・研究を重ね、その結果を皆さんにお届けできればと思います。



近現代

七月と八月に史料検討会を開催しました。福岡市博物館と福岡市総合図書館が所蔵する史料もしくは史料を撮影したマイクロフィルムをプリントアウトしたものを閲覧して、資料編に掲載する史料の用途を立てていく作業です。

福岡近現代史のネックは中核となる史料群に恵まれないところです。

そこで史料検討会を開催し、まずは博物館と図書館が所蔵している古文書の中から、目録を参照しつつ史料をピックアップして読んでみます。目録に記載されている情報は簡易なものが多いので、実際に資料編に採用できるかどうかは見てみなければわかりません。まる二日かけて何千点という史料を眺め、目星がついた史料は百点弱。そうこうしていると、福岡県立図書館の所蔵する史料に有望なものがあるという情報が入り、今度は県立図書館に調査に出かけます。はたして資料編に採用できる史料かどうか、調査はまだ続きます。

民俗

平成二十一年度に刊行予定の特別編『現代絵巻・福岡(仮)』に向けて、聞き取り調査を行っています。

聞き取り調査という手法は、テレビ・雑誌で見かけるようなインタビューとさほど変わりません。ただし民俗調査では、事前に細かな質問票を用意していくことはまれで、問答という形ではなく調査者と話者との対話形式で進めていくケースが多いと言えます。

というのも、対話の中でふと口について出る何気ない言葉や、話者にとって当然で気にも留めない日常的なやりとりが、調査する側にとっては重要な意味を持つことが多いからです。

そうしたさりげない言葉に潜んでいる世相・土地柄を反映するキーワードや、仕事の知恵・ふるまいの作法・人との付き合い方など、処世のコツのようなもの、それらを地道に追求していくことで、福岡・博多というものの全貌が浮かび上がってくるのではない



調査の一例です。この日は西区小戸にお住まいの西川義夫さん(写真左)にお話を伺いました。

か、そうした視点で民俗専門部会は調査を行っています。

読めるかな
難度 ★★★★★

地名よみかたクイズ

左にあるのは、福岡市にある地名です。タテの枠に読み方を入れてください。薄橙色のところを左から右へ読むと、「博多っ子」お馴染みの道路が現れます。答えは8ページ!

愛宕	御飯山	倉原山	草香江	重留	日佐	社領

*** 広報誌バックナンバーの記事は、ホームページでご覧いただけます。***

江戸時代の博多

博多松囃子の起源は古いとも言われますが、現在伝わっているものは、近世初め頃(小早川時代)に一時中断したあと、江戸時代に

祭は毎年正月一五日に行われ、博多から、仮面をかぶり馬に乗った福神、恵比須、大黒の三福神と、台車に乗った稚児(児)の行列などが、福岡城三の丸の館に向向き、藩主や一族、重臣などに年始の挨拶をし、稚児の奉納舞などが行われ、その後博多の町々を廻ってお寺や家々を祝いました。

運営は、博多の行政と自治の組織である流(町組)のうち、太閤町割以来の七流が中心となり、三流(魚町、石堂、洲崎)は三福神を仕立て、四流(東町、呉服町、西町、土居)は稚児を仕立てて祭

を盛り上げました。松囃子の当番となった流では、正月五日から太鼓などの練習が始まります。衣装

その他の準備を整え、当番町の中をめぐるとの予行演習をおこなったと言われています。

このほか、「とおりもん」と呼ばれる作り物の山車も仕立てられ、踊りや仮装行列などが盛大に続いて、新春のにぎわいに華を添えました。

なお現在、三福神の行列は「博多どんたく港まつり(五月三・四日)」の朝に、「とおりもん」などの行列は、昼間の市民大パレードとして見る事ができます。

背景：通物の図「筑前名所図会」より
上段：松囃子「追懐松山遺事」より
(左から、釜鉾・大黒・恵比須・福神)福岡市博物館蔵

表紙の写真は…

昭和二(一九二七)年開催「東亜勸業博覧会」広報のためにつくられた大型のポスターを表紙のモチーフにしました。オール・ヌーボー調の華やかな構成ですが、どこことなく和の雰囲気を感じ出しています。

博覧会は、朝鮮・台湾のほか各国からも出品・参加された華やかなものでした。六〇日間に一六〇万人が詰めかけたその会場は、博覧会開催のちょうど五〇年前に、

陸軍が鳥とたたかっていた(特集「鳥VS人間」)あの福岡城西側の大濠埋立地です。鉄砲から博覧会へ、ひとつのこと(今回は場所ですが…)に注目すると、時間の移り変わりを辿

ることが出来ます。また、ひとつの時代に注目すると、その時の人や文化の姿が見えてきます。歴史の視点はさまざまで、立ち位置を変えると、同じ資料も新鮮に見えてきます。

このポスターは、福岡市博物館常設展示でも豊かな色彩を放っています。ひと昔前へ誘ってくれる、そんなポスターです。



福岡市博物館蔵
期番 昭和二七
場會 市博福
園公面於

福岡市史ホームページ
公開中
福岡市役所ホームページ内、
魅力/歴史と自然の欄を参照下さい
<http://www.city.fukuoka.jp/>

読めるかな？ 二 解答

- 西 区：愛宕
- 早良区：鹿原山・重留
- 中央区：草香江
- 南区：日佐
- 東 区：社領・御飯山

右	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
重	重	重	重	重	重	重	重	重	重	重
留	留	留	留	留	留	留	留	留	留	留
草	草	草	草	草	草	草	草	草	草	草
香	香	香	香	香	香	香	香	香	香	香
江	江	江	江	江	江	江	江	江	江	江
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐	佐
社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社
領	領	領	領	領	領	領	領	領	領	領
御	御	御	御	御	御	御	御	御	御	御
飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯	飯
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山

大博覧会

市史だより Fukuoka 第6号

平成19年12月15日発行

編集・発行/福岡市博物館 市史編さん室
〒814-0001 福岡市早良区百道浜3-1-1
Tel 092(845)5245 Fax 092(845)5019